教職研究　第34号
立教大学 教職課程 2020年3月

Persuasive Writing の指導と評価

伊東　武彦

はじめに

Persuasive Writing（PW）は、自分の主張や意見を読み手に伝えて説得することを目的とするライティング技法である。英語圏の生徒は、初等教育から高等教育まで一貫したPWの明示的指導を受けて説得力のある文章の書き方の習得をめざす。PWは、英語圏においては提案、批評、社説、ノンフィクションなどの多様なジャンルで用いられるスタンダードな表現様式なので、世界共通語として英語を学ぶ日本人英語学習者にとっても習得すべき技法である。

英国において、中等教育終了段階にある16歳の全生徒が受験する資格試験General Certificate Secondary Education（GCSE）のEnglish LanguageにはPWが出題される。出題された問題および公表されている評価基準によって評価方法の分析が可能になる。

我が国では、記述試験の導入を巡り論議が継続されている。想定される問題の中にはPWと認められる出題がある。しかし、指導者はそうした認識に基づく体系的指導を行う段階には至っていない。英語圏におけるPW指導は、我が国においても説得力を重視するライティング指導を行う意義とその指導法について新たな視点を与えてくれるだろう。

1．先行研究

説得は英語圏の人々にとっては重要な概念であるが、「日本人にとっては、相手を意識的に説得しなければならないという考え方ははなはだ希薄だ」（岡部、1993：75）と、以前から説得について英語話者と日本語話者の間には文化的相違があると指摘されている。したがって、日本人が英語という国際共通語を使う際には、自文化では意識されにくい説得という行為の英語圏における重要性の理解とその技法の習得が大きな課題となる。

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説（外国語編、英語編）』の「書くこと」の目標には、「情報や考え，気持ちなどを複数の段落から成る文章で論理的に詳しく書いて伝えることができるようにする」と書かれている。「複数の段落から成る文章で論理的に詳しく書いて伝える」ことについては、「『英語コミュニケーションⅡ』における『論理性に注意しながら』を発展させ，論理の一貫性に注意するだけではなく，理由や根拠の適切さや，どのように述べれば説得力が高まるかなどについて考え，論理性を高めるための工夫をしながら，理由や根拠などを詳細に説明する」と説明されている（p.79）。これはまさにPWを指しているのであり、学習指導要領はPWも指導項目として考えていることは明らかだ。では、実態はどうだろうか。

日本人英語学習者を対象にしたPWの研究はいくつかある。Suzuki and Ochi（1999）は、

大学生を対象に PW における言語学的および修辞学上の特徴を調査し、上級者は 1 つのエッセイの中で多くのテーマについて述べるのではなく限定されたテーマを詳述することを明らかにした。一方 Hirose（2001）は、大学生の英語力とライティング構造パターンの間には相関はなく、英語力が低い学習者も英語ライティングの構造に則って日本語で文章を書くことで演繹的スタイルを作り出し、それを英語の PW に適用させることは可能だと結論づけた。これら以外にも PW の研究はあるものの中等教育の学習者を対象にしたものではなく、中学及び高等学校で PW の指導が広く行われている兆候はない。PW は学習指導要領の目標には掲げられているものの、そもそもこの技法が英語教育者に充分に認知されているとは言い難く、当然ながら評価についても論議されていない。そこで、英語圏における PW 指導を紹介することには価値があると思われる。

2　Persuasive Writing

PW は “five paragraph essay” とも呼ばれ、主張・意見をまとめたイントロダクションの段落、その主張・意見を説明する 3 つの理由とそれらをサポートする文章で構成される 3 つの段落、イントロダクションで述べた主張・意見を繰り返して強調するコンクルージョンの段落の計 5 段落を基本構造とする。

2.1　カイ君のエッセイ

トロント在住の 9 歳の少年、カイ・アンダーソン君が書いた英文エッセイを読む機会があった。エッセイのタイトルは “Why You Should Visit Japan!” で、日本のすばらしさを同級生に伝える目的で書かれた。彼の父はカナダ人、母は日本人で、毎年夏には千葉にある母の実家でひと月を過ごす。

カイ君のエッセイは、イントロダクションで “Japan has the best food, natural beauty, technology and hospitality in the world.” とメイン・アイディアを示し、ボディでは food, natural beauty, technology, hospitality の項目ごとのパラグラフでそれぞれの魅力を主張する構成を取る。各項目の素晴らしさの説明・紹介では詳細な情報および自らの体験が述べられ、それが主張の根拠となってエッセイに説得力を持たせている。

食について述べるボディの第 1 パラグラフでは “If you go to Japan, you will love the food.” とトピック・センテンスを掲げる。それに続いて “Sushi is very tasty in Japan” と寿司の話題を提示し、直後に “because Japan is an island surrounded by sea. There is a world famous fish market in Tokyo which is called Tsukiji. The Tsukiji world famous fish market is five times as big as the Rogers Centre.” と、日本の寿司がおいしい理由を日本の地理的条件と大きな魚市場が存在することであるとし、さらに読み手の身近な例（Rogers Centre）を用いてその規模を説明する。その後、“the beef in Japan is really outstanding.” と話題は和牛に移行する。“There is high quality beef” と紹介し、その理由を “because the farmers feed beer to the cows and also massage them. Cows are even praised and complimented by farmers to reduce their stress!” と説明する。このパラグ

ラフは “Man, I want to be a Japanese cow!” とユーモラスに締めくくられる。

その後の３つのパラグラフで、natural beauty、technology、hospitality について述べた後、コンクルージョンでは、日本の魅力についてイントロダクションとはやや異なる表現 “Now that you know how good the food, natural beauty, technology and hospitality is, don't you want to go to Japan?” を用いて、エッセイを書き終えている。すべての文は、メイン・アイディアを支えるために有機的に組織されており、逸脱すなわちメイン・アイディアから外れる文はひとつも見当たらない。

説得力に富むエッセイである。これを読んだカイ君の友人たちは、日本に興味を持ったに違いない。9 歳の少年が、母語であるにせよ英語の PW の構成に則り、さらに効果的なレトリックを駆使してこのようなエッセイを書ける指導がなされているという事実は衝撃的ですらある。

2.2 PW の指導指針

PW の指導では、3 つの技法が教えられる（Guillain、2015）。

1）事実や統計、権威ある人物の発言、研究結果などの確固たる証拠を提示すると信用と権威を築く。
2）書き手の体験や観察に基づく具体的かつ関連性のある例もしくは逸話は、書き手の主張を強化する。
3）正確で最新の情報は信用を高める。

これらの技法がカイ君のエッセイにどう用いられているか分析する。ここに示したのは、日本の natural beauty の素晴らしさを主張する第３段落である。文中の下線（1）～（3）は技法の番号に対応する。

Next, I am going to talk to you guys about some of the beautiful and natural places in Japan. You may have heard of Mount Fuji. <u>（1）Mount Fuji is the highest mountain in Japan. It is almost 4000 metres tall –（2）that's about seven times as tall as the CN Tower!</u> <u>（3）There are five lakes around Mount Fuji and those five lakes were admitted as World Heritage sites in 2013.</u> <u>（2）When the sun rises and sets, it reflects on the lakes and it looks absolutely beautiful!</u> Also <u>（1）there are over 3000 hot springs in Japan,</u> <u>（2）and if you are lucky, you may see a snow monkey having a bath in a hot spring!</u>

この１つのパラグラフだけを見ても３つの技法が網羅されていることが確認できる。このように技法に従った主張の展開は、説得力を高める。

３　GCSE における PW

英語圏の学校教育における PW の重要性は、それが公的試験に出題されることからも明らかである。英国で実施される GCSE の English Language の試験に毎年出題される PW は問題と評価基準が公表されており、その分析によって中等教育終了段階で求められる PW のレベルと質を明らかにすることができる。

3.1　GCSE

英国[1]では、義務教育が終了する 16 歳の時に GCSE（General Certificate Secondary Education）と呼ばれる中等教育資格試験を受験する。これは、全国規模で実施される義務教育終了段階の学力評価試験であり、結果は大学入学出願資料の一つとして扱われる[2]。生徒は 2 年間をかけて準備し、8 から 10 科目を受験する。成績は、9 ポイントスケールで評価され、グレード 9 は最高の成績、グレード 5 以上が良い成績と見なされる。

3.2　GCSE の English Language

GCSE の English Language の試験概要を示す。紹介するのは、民間試験団体の Eduqas[3]が 2018 年に実施した English Language-Component 2 である。試験時間は 2 時間、問題はセクション A と B に分かれている。

- セクション A（長文読解、60 分、配点 40 点）長文に対する設問は 10 問で、すべてが記述式である。設問を質的に分析すると、テキストに明示されている情報を述べる事実設問が 6 問で配点は計 6 点、テキストに書かれている情報に基づく推量設問は 3 問で配点は計 24 点、回答者の見解や体験を問う自己表現設問は 1 問で配点は 10 点である。
- セクション B（作文、60 分、配点 40 点）作文 2 問。時間配分は、1 問につき構想 5 分、記述 25 分が想定されている。求められる長さはそれぞれ 300 ～ 400 語、配点は各 20 点である。

3.3　PW の設問

セクション B の第 2 問目は PW と明記され、「下記は、ティーン向けの雑誌の記事の一部です。このテーマについてあなたの見解を示す手紙をこの雑誌に書きなさい」との指示に続き、以下の記事が提示される。

> I’m fed up reading about celebrities and sports stars behaving badly. They do no good and a lot of harm. The worst thing is that teenagers are easily influenced to think they can copy them and behave the same.

回答者は記事に対する賛否を示し、それに続けて主張を裏付ける論を展開して読み手を説得することが求められる。[4]

これは現代社会の一つの課題、すなわちメディアが特別扱いする人々の行動と SNS などの不適切な使われ方に対する批判精神を問うもので、社会性の高い設問である。16 歳という受験生の年齢を考えると、さらに選抜試験ではなくて全員が受験する資格試験の性格を考えたとき、レベルが高いとの印象を拭えない。日本の高校 1 年生がこの設問に対処することができるかと考えると、教育関係者の多くは悲観的になるだろう。ここに示した Eduqas 以外の 5 社の問題も社会的視点に基づく見解の表明を求めている点では同じである（Appendix 参照）。英国と日本の 16 歳を、社会問題に関する関心およびそれに対する意見の形成の点で比較すると、両者の間には歴然たる差が存在すると思われる。これについては、4.1 でも述べる。

3.4　PW の評価基準

Eduqas の PW の評価基準の項目は、「コミュニケーションと構成」と「語彙、文法、スペリング、句読点」に大別されており、前者は後者より高い配点が与えられている。PW の適切な構成に従うことの方が、文法的正確さよりも重視されていることが明らかである。band（得点帯）は高い順に 5 から 1 までの 5 段階が設定され、各 band の基準が表示されている。ここでは、紙幅の都合により band 5 と 1 のみ示す。[5]

	コミュニケーションと構成 12 点満点	語彙、文法、スペリング、句読点 8 点満点
Band 5	11 － 12 点 ・タスクの目的とフォーマットについての高度な理解 ・読者および聴衆への持続的認識 ・目的および聴衆に自信をもって適用できる適切な register（使用域） ・内容が野心的で、核心に迫り、高度である ・アイディアは確信をもって発展し、広範囲の関連性がある詳細情報によって発展し支持されている ・作文の形と構造が高度である ・コミュニケーションが野心的で高度である。	8 点 ・文法に適切で効果的な多様性がある ・ほぼすべての文章構造が統制され正確である ・多様な句読点が自信を持ち正確に使われている ・複雑で不規則な語を含むほぼすべてのスペリングが正確である ・時制と時制の一致の統制が確実である ・適切で野心的な多様な語彙が、効果を生み、正確な意味を伝えるために使われている。
Band 1	1 － 2 点 ・タスクの目的とフォーマットについての最小限の認識 ・読者および聴衆への最小限の認識 ・目的および聴衆に register（使用域）を適用しようとするいくつかの試み ・テーマの扱いにはムラがあるが、いくつか適切な内容がある ・内容は薄く短い ・アイディアは単純に並べられている（段落は明らかな区分を示すため、あるいはアイディアの塊をある順序で示すために使われる） ・最小限の明瞭さはあるが、意味の伝達は限定的である	1 点 ・わずかな文法多様性 ・文章構造の統制がわずかにある ・句読点を使用しようとする ・いくつかのスペリングは正確 ・時制と時制の一致の統制がわずかにある ・わずかな語彙の多様性

表 1　Eduqas 社の評価基準（アンダーラインは、筆者による）

評価基準で使われる形容詞は段階的に変化する。「コミュニケーションと構成」の領域における「タスクの目的とフォーマットについて」の項目を見ると、Band 5 では「高度な」(sophisticated)、Band 4 では「一貫性のある」(consistent)、Band 3 では「明らかな」(clear)、Band 2 では「いくつかの」(some)、Band 1 では「最小限の」(basic) と、形容詞を使い分けて 5 段階の技能の差異を表現する。評価項目は多岐に渡り、PW を総合的に評価するための緻密な基準であると思われる。しかし、評価者がこの基準を適用するにあたって band 間の差異をどう識別するのかという点になると、この基準の実用性に疑問が生じる。例えば、Band 5 の「高度な」(sophisticated) と Band 4 の「一貫性のある」(consistent) の違いは何に基

づいて判定されるのか。同じことはそれ以下の band 間にも言える。Band 3 では「明らかな」(clear)、Band 2 では「いくつかの」(some)、Band 1 では「最小限の」(basic)。この段階的評価基準をそれぞれのエッセイに当てはめて評価するには高度な判断力が求められ、それに加えて評定者間信頼性も保証されなければならない。しかし、提示されている基準だけではそれらが可能だとは言い難い。採点例を伴うより綿密な評価指針の提示が求められる。

3.5 4 技能試験におけるライティングの評価項目

わが国で導入が検討されている 4 技能試験のいくつかは、評価基準をインターネット上で公開している。それらを分析して互いの評価方法の違いを明らかにする。

3.5.1 英検

2 級のライティングは、社会的な話題に対して賛否を問うと共にその理由を書くことを求める。過去問[6]（“Today, some young people do not want to start working for large companies. Do you think the number of these people will increase in the future?”）から、この出題は PW だと認められる。評価項目として示されるのは以下の 4 点である。[7]

(1) 内容　課題で求められている内容（意見とそれに沿った理由）が含まれているかどうか。
(2) 構成　英文の構成や流れがわかりやすく論理的であるか。
(3) 語彙　課題にふさわしい語彙を正しく使えているか。
(4) 文法　文構造のバリエーションやそれらを正しく使えているか。

ここに示された 4 項目は、文章全体への評価（(1)、(2)）と文の評価（(3)、(4)）に分けられる。文章全体への評価基準はかなり大まかな記述で、それぞれがどのような評価の視点を有しているのかは示されていない。

3.5.2 GTEC

Writing Part B は、与えられた社会的テーマに対して自分の意見と理由を述べる問題であり、評価基準と共に掲載されている例題（「現在、高齢化社会を迎えたといわれています。高齢化社会の問題点と思われる事例を取り上げて、そのことに ついてのあなた自身の考えとその理由を述べなさい」）から、PW だと認められる。評価基準（要約版）は次のように示されている。[8]

Score	意　　見	理　　由
○	課題に対する自分の意見を伝えることができている。	自分の意見をサポートする理由や具体例などを伝えることができている。
×	課題に対する自分の意見を伝えることができていない。	自分の意見をサポートする理由や具体例などを伝えることができていない。

「意見」とは書き手の主張・意見、「理由」とは主張・意見の根拠であり、この 2 つは説得力を評価する項目であり、文章全体への評価である。これらとは別に「語い」、「文法」、「構成・展開」の 3 つの項目が設定され、それぞれの評価基準が添えられている。その中から最も高いスコア（6 ～ 8）の評価基準を示す。

Score	意　見	理　由	構　成・展　開
6 ～ 8	さまざまな語いを使って、自分の考えや物事を詳しく説明することができる。一部誤りがあっても、意図した内容を十分に伝えることができている。	基本的な文法に加えて、複雑な文法を使うことができる。一部誤りがあっても、意図した内容を十分に伝えることができている。	書かれている内容のつながりがわかりやすく、全体としてよく構成されている。

この評価基準の記述から「語い」と「文法」は文に対する評価項目であるのに対し、「構成・展開」は文章全体への項目であることがわかる。

3.5.3　IELTS

Writing Task 2 は、与えられたトピックに対する見解を述べる問題である。問題例[9]からこの出題は PW だと認められる。

例：Car ownership has increased so rapidly over the past thirty years that many cities in the world are now 'one big traffic jam'. How true do you think this statement is? What me asures can governments take to discourage people from using their cars?

評価項目と段階評価 9（最高点）の採点基準は以下の通りである。[10]

課題への回答	一貫性とまとまり	語彙力	文法知識と正確さ
・課題の全ての部分に完全に取り組んでいる ・回答に対し、関連性のある、詳細で十分な裏づけのある理由を提示し、確固とした見解を示すことができる	・目立つことなく自然に接続詞を使用している ・段落分けをうまく行っている	幅広い語彙を単語の特徴を生かして自然かつ 洗練された方法で使用でき、軽微な誤りがまれに「うっかり起こる」	様々な構文を非常に柔軟にかつ正確に使いこなすことができ、まれに軽微な誤りが「うっかり　起こる」

採点基準の記述から、「課題への回答」と「一貫性とまとまり」は文章全体への評価項目であり、「語彙力」と「文法的知識と正確さ」は文に対する評価項目であることがわかる。

3.5.4　GCSE と 4 技能試験の比較

英検、GTEC、IELTS の中の PW だと認められるライティング試験の評価項目を上で示した。これらを GCSE の PW の評価基準（表 1）と比較する。比較に当たっては、文への評価ではなく文章全体への評価項目に限定する。その理由は、文への評価項目の設定には高い共通性が見られ、試験による違いは少ないからである。

GCSE の PW の評価基準（表 1）の「コミュニケーションと構成」は文章全体への評価項目であり、その中には 6 つの評価項目が存在している。それらは、(1) 目的の達成、(2) フォーマットへの準拠、(3) 読者への効果、(4) 適切さ、(5) 内容の高度さ、(6) アイディアの発展性、である。それと英検、GTEC、IELTS のライティング試験の評価項目を対照させたのが表 2 である。

試験	文章全体への評価項目
GCSE	目的の達成、フォーマットへの準拠、読者への効果、適切さ、内容の高度さ、アイディアの発展性
英検	内容、構成
GTEC	意見、理由、構成・展開
IELTS	課題への回答、一貫性とまとまり

表２ GCSE と４技能試験の文章全体への評価項目

これから明らかになることは、1）GCSE と 4 技能試験の評価項目数は大きく異なり前者は後者を上回る、2）4 技能試験における評価項目の設定の仕方には統一感がなく相互に異なる、3）4 技能試験にはフォーマット（イントロダクション、ボディ、コンクルージョンのなどのスタイル）、読者への効果、適切さ、アイディアの発展性の項目が欠如している、の計 3 点である。

こうした相違を生み出す原因の一つは L1 と L2 の違いにある。L2 ライティングは L1 と同等のパフォーマンスを期待することは困難だ。もう一つの原因はより重大で、試験を実施する側に PW であるとの認識が欠如し、説得力の構成要素が理解されていないからである。

４　PW 導入上の課題

我が国の言語教育への PW の導入を阻む事情が存在する。それは、日本の生徒はそもそも語るべき内容を持っていないのではないかとの疑いであり、それを示唆する事例が報告されている。これは PW の前提の欠如という深刻な問題であり、その一因は断片的知識の記憶が中心となりがちな教育[11]に存在すると推測される。これは、単独教科を超えた日本の教育全体に関わる課題である。

4.1　ケンブリッジ大学の学生が日本に対して持つ不満

ケンブリッジ大学日本学科の学生は、３年生になると京都大学、同志社大学、立命館大学などに留学する。しかし同学科の准教授クシュナー（2014, 59）によると、彼らの多くは不満を感じて戻ってくるという。

> 日本に行った学生は、帰ってきてから「日本人と政治や経済や国際関係について語り合えなかったので、そういう議論で使う日本語を覚えられなかった」と言います。それが彼らの最大の不満です。結果として彼らが持つ日本のイメージは「誰も政治や経済に関心を持っていない国」「誰も日中関係に興味を持っていない国」というものになります。そして、「自分たちはケンブリッジでそういうことを学んだのに、なぜ肝心の日本人は無関心なのか」という違和感を抱くに至るのです。

ケンブリッジの学生は、日本人学生の英語力の低さに不満を感じているのではない。日本語を学ぼうと留学した彼らは、日本語での議論を望んでいたのである。ところが、日本人学生は自国の情勢について語る内容、すなわち知識や意見を持ち合わせていなかったのである。日本人学生は個人的な話題もしくは社会的でも浅い話題については語る内容を持っているに違いない。それは趣味、学校生活や日常の出来事、もしくは天候やスポーツの勝ち負けなどである。

しかし、「政治や経済や国際関係」といった社会的で深い話題、すなわち国際的なコミュニケーションの場で語られるテーマについては自らの見解を持ち合わせていなかったということであろう。これは説得力をどう高めるかの論議以前の、語るべき内容の欠如を窺わせる象徴的な事例であり、PW の日本への適用を阻む大きな障害となると危惧される。

5　おわりに

本名（1989: 365）は、英語話者は「ことばをコミュニケーションのもっとも重要な道具ととらえ、伝達の状況に合わせて発話計画を入念に練り、ことばを精密に組み立てようとする」のに対して、日本語話者は察しの働きに依存するので「事実や意見をわかりやすく、効果的に伝達するのが苦手である」と述べている。

日本人が価値を置く以心伝心などの言語習慣は一面から見れば美しい文化であり、全面的に否定されるものではない。しかし、その文化を生きる日本人が国際的なコミュニケーションの場で英語話者と対峙した時、日本人は二重のハンデを背負うことになろう。第一に日本人にとっては外国語、かたや相手にとっては母語である英語を使うこと、第二に察し合いに依存して言語を駆使する習慣を持たない日本人と、かたや論理的な主張の展開をめざす PW の指導を受けて説得力を身につけた相手。仮に双方の利益をかけた折衝の場だとしたら、勝敗は最初から決しているだろう。また、社会的な話題に対する自分の考えを持たないという問題に対しては、英語という単独教科を超えた問題提起が求められよう。

語彙、文法、発音などの言語要素の定着は大切だ。英語教育者はそのための指導に従事しつつも、それを超える領域への展望を持つことが期待される。英語圏の PW 指導は私たちにそのことを気づかせてくれる。評価については検討の余地が大いに残されている。そうした課題も含めて、日本の英語教育に与える示唆は大きい。

注

1. GCSE はイングランド、ウエールズ、北アイルランドで実施される。スコットランドでは、Standard Grade 又は Intermediate と呼ばれる独自の試験を実施する。なお、イングランドでは GCSE の結果に基づく学校順位を示すリーグテーブルが公表されている。それは「プログレス８」と呼ばれ、生徒の 11 歳時の成績から 16 歳で受けた GCSE までの伸び率の順位である。
2. 義務教育終了後、大学入学希望者はシックスス・フォームと呼ばれる２年制の教育機関へ進学する。そこでは、GCE（General Certificate of Education）試験を受験する。第１学年では AS（Advanced Subsidiary）level、第２学年では A2 level を受験する。これらをまとめて A-Level 試験（The General Certificate of Education Advanced Level）と呼ぶ。A-Level とは別に IBDP（国際バカロレアディプロマ）を取得し、その成績を大学に出願することもできる。シックスス・フォーム以外にも職業訓練用のカレッジに進むルートもある。高等教育への進路は GCSE の成績による。

3. 試験団体には他に AQA、CIE、Edexcel、OCR、WJEC がある。この中で “Persuasive Writing” との名称で出題しているのが Eduqas なので、本研究ではこれを紹介する。なお、その他は “Writers’ viewpoints and perspectives” や “Transactional Writing”、“Directed Writing” と称して出題しているが、いずれも PW と等しい能力を問うていることは各団体が公表する評価基準（marking scheme）から明らかである。
4. http://pastpapers.download.wjec.co.uk/a18-c700u20-1a.pdf　2020年1月10日閲覧
5. https://www.gillingham-dorset.co.uk/Documents/Curriculum/Year%2011%20Revision/English%20Language/Nov%202018%20Comp%202%20Mark%20Scheme.pdf　2020年1月10日閲覧
6. https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/grade_2/pdf/201902/2019-2-1ji-2kyu.pdf　2020年1月10日閲覧
7. https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2016scoring_w_info.html　2020年1月10日閲覧
8. https://www.benesse.co.jp/gtec/fs/pdf/GTEC_WritingScoringCriteria.pdf　2020年1月10日閲覧
9. https://www.ielts-exam.net/ielts_writing_samples_task_2/1044/　2020年1月10日閲覧
10. https://ieltsjp.com/wp-content/uploads/sites/3/2019/07/JP-Writing-2-rotated.pdf　2020年1月10日閲覧
11. 淺沼（1998、22）は社会科教育を例に挙げ、「日本の多くの社会科教育の実践は、教科書の知識が唯一の真理であると絶対視し、それを疑うことなく覚え、ただ知識の断片的な暗記力を試しているにすぎない」と述べている。また、大学進学希望者の多くが受験することから我が国の教育に一定の影響力を与えてきたセンター試験は伝統的に多肢選択式を採用しているが、石井（2019）は「多肢選択などの客観テストは、現実世界と切り離された無味乾燥な文脈で、断片的な知識・技能を問うものである」と 伝統的な評価方法の断片性を批判している。

参考文献

浅沼茂（1998）「『新学力観』の問題点」『比較教育学研究』第 24 号 , 19-20.

石井英真（2019）「パフォーマンス評価とルーブリックの基礎と最前線」https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/movie/pdf/2014/20150313_Ishii.pdf 2020 年 1 月 20 日閲覧

岡部朗一（1993）「日本のレトリック」『日本人のコミュニケーション』橋本満弘・石井敏編 桐原書店，55-81.

田中真理・長阪朱美（2006）「第 2 言語としての日本語ライティング評価基準とその作成過程」独立行政法人国立国語研究所編『世界の言語テスト』くろしお出版、253-276.

バラック・クシュナー（2014）「日本の歴史と現在をケンブリッジではこう教える」『Courrier』2014 年 7 月号，　56-59.

本名信行（1989）「日本語の文体と英語の文体一言語使用の背景にある文化と社会 1」『日

本語の文法・文体（下）』北原保雄編　東京；明治書院，363-385.

Cummins, J.（1981）The role of primary language development in promoting educational success for language minority students, in California State Department of Education（ed.）, Schooling and Language Minority Students; A Theoretical Framework, 3-49, Los Angeles: Evaluation, Dissemination and Assessment Centre, California State University.

Guillain, C.,（2015）. What is Persuasive Writing?. Raintree Perspectives.

Hirose, K.,（2001）Persuasive Writing in L1 and L2: A Look at Japanese EFL Students' Rhetorical Organization Strategies.『大学英語教育学会紀要』（33）, 43-56.

Suzuki, M., and Ochi, K.,（1999）A Study of Japanese Students' Writing: From linguistic and rhetorical perspectives.『全国英語教育学会紀要』10（0）, 113-122.

Appendix

Eduqas 以外の試験団体の PW の設問

AQA

'All sport should be fun, fair and open to everyone. These days, sport seems to be more about money, corruption and winning at any cost.'

Write an article for a newspaper in which you explain your point of view on this statement.

Edexcel

Write the text for a speech you will give to your peers about an important person in your life. In your speech, you could include:

- information about who the person is,
- reasons why they are important to you,
- the ways this person has influenced you.

CIE

Imagine you are a pupil in a school where a decision has been made either to abolish or to introduce compulsory school uniform. You have been invited by the headteacher to write a letter to him/her, giving your views and advice on the topic. In your letter you should:

- select the relevant arguments in the transcript to support your views
- develop and evaluate those arguments to make a convincing case about whether school uniform should be abolished or introduced in your school.

WJEC

Your Headteacher/Principal plans to ban all mobile phones and social media use for students while they are in school/college. You feel strongly about this proposal and decide to write a letter to your Headteacher/Principal giving your views on this matter.